

後
篇

皮 殻

我等はミオヤの子たると共に人の子である。人の子たる我等には、染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮殻が強く／＼結びついてゐる。

是が爲にややもすれば自己を暗黒に引き込まれて、惡道におとしいれんとしてゐる。佛子としてのきよき心はかすかにして、なか／＼顯れにくい。

ミオヤの恩寵をこうむり、光明に靈化せられて、はやく光明のもとに生活し得るやうに、専らミオヤの恩寵を仰ぎ、慈光に導かれんことを期すべきである。

心は西にうつせみの

此の頃の蟬の鳴く聲を聞くにつけても自づと思ひ出づるは法然上人の

あみだぶと心は西に空蟬の、もぬけ果てたる聲ぞ涼しき

の道詠にて、何とも懐しく感ぜらる。彼の蟬はもぬけ骸よりぬけ出で、中實はいかにもきよく潔よく聲を涼やかに歌うて居る。私共も一心に念佛する時は此身はむくろの夫と同じやうに成りてこゝろは彌陀尊の中にぬけ出で、我を離れてあみだが我か、我があみだかとまでに成りて、稱ふる時は、心はいかに涼やかに、其心のいかにもすがすがしさが自づと聲にあらはれて、すゞしき音すなり。

それとも兎にかく口には御名を唱へても心はよそ事にのみ構ひてあらば、それは中味のなきむくろにて、否たゞにむくろのみにあらでくさぐさの雑念妄想のみに耽りて居たらば唯だ口を費すのみ。されば聖法然上人が念佛してミダに深くほれぐと想ひ込みたる心の内こそゆかしけれ。實に其あみだ佛にこゝろを遷したる上人の心は宛がらみだに異らず。されば時の人々が形を見れば法然房實はあみだ如來とひとへに歎美したるも理りなり。

彌陀尊は光明普ねく平等に照り渡りてまします。こなたが其光明に接せんが爲に、ミダ尊に眞正面になりて、心をミダ尊に致す時は、アナタの光明はこなたの頭上より全身に入り來りて、こなたの心がいつしかアナタの心と同じやうに化しぬるを疑ふことなかれ。

世には眞のミオヤの聖名をだに知らで空しく人生を闇の中に葬り去る人こそは實に憐れにこそ。併し乍らかかる人とても同胞たることは異らず、願くは世のミオヤを離れたる同胞の爲めに一掬の涙を注ぎてミオヤの聖意を御知らせ申さばや。また世は日々幾千萬遍となく稱名し乍らも心には毫もミオヤを慕はしくもまた懐しくも思はで、稱名は唯だ死後の冥福を祈る呪文のやうな族も少からぬ。同じく同情に耐へぬ。

南無あみだ佛と御名よぶ眞正面に彌陀世尊は現に在ますなり。若し彌陀世尊はましまさぬに御名を呼び奉るは無意義の事にて、實に彌陀世尊なる絶待人格在ます信念によりてこそ始めて活ける信仰とはなるなり。

心本尊と申すことは吾等が心中に何時も離るゝことなき尊き活ける本尊をおすゑ申置く事なり。例へば大殿の中臺に御尊像を安置する如くに、私共の頭の中臺に彌陀尊を安置して、常に御本尊の威神と慈悲の光明に照され邪と惡とを捨て正と善とに就く御みちびきにあづかることなり。我らが心本尊とは吾らが面前に如來は萬徳圓滿なる絶待人格として眞正面に在まして圓かに照し給ふ事なり。此信念の前には、いかに我らが如きあさましきものも自づと清く高く靈に有り難き心と成る。威神の光明

赫々として我らが頭上を照し給ふを想ひ奉れば、自づと私共は歸命頂禮の心が起きて、何とも尊く感ずるなり。また彌陀尊の慈悲に充しめ給ふ御すがたを想ひ奉れば、何とも云はれぬ御懐しさとかたじけなさを感じざるを得ぬ。

拍子の音

禪の公案に隻手の音を聞と云ふあり。禪は形式的の悟道なれば、自己の先天的の自性を開き即ち無聲の音を聞くに、無聲の聲を以て自性を見るの手段とす。禪には宗教的客體の神を立てず。自己の本來の自性顯れ來る處に見性成佛す。今念佛門には其れと反對に、我等が信仰の客體に阿彌陀佛を本尊として之に歸命信順して其双方の間に最も完全なる親密なる關係、即ち兩方の合致した處に、初めて宗教心が成立つ。之を衆生心水淨む時は佛日の影中に宿る。月は天に照して影水に映す。月如何に皎々たるも水無き時は影を現はし難く、また水は滿つるも月なければ反映せず。衆生の信心と如來の恩寵の和合する處に感應同交し、此双方の關係は實に親密なるを要す。

如來の大慈悲心に衆生心の和合する處に感應同交初めて眞の宗教は成立つ。而して此双方の關係は恰も兩手の相拍つ處に、拍手の音は聞ゆる如し。故に今は自心が彌陀に合して感應同交の妙音を聞くことを得て始めて眞實の信仰は得たるものとす。唯だ此の感應同交を言語の上にも會する如きはいまだ眞の拍手の音を聞くと云ふに足らず。須らく三昧發得して眞の拍手の妙音を確と聞き、また彌陀の答を聞くべし。

人生の宗趣

念佛三昧爲_レ宗。宇宙の主なる彌陀と三昧交感又は光明獲得を宗とす。

往生淨土爲_レ趣。光明の生に復活又は更生。現在は理想的涅槃（光明生命）未來は實在的涅槃。

宗。宇宙絶待的主なる如來、衆生心想中に靈應身を以て交感す。斯の靈感即ち宗教的生命なり。如來の靈應常に衆生の心殿に在して中心本尊として指導し給ふ。

趣。已に復活して靈的生活として光明中にありて、如來照鑑の下に活ける如來を本尊として、一切の

時一切の所に於いて其神聖なる統治の下に靈き生命として事へまつる。

大宇宙の中心最高なる法界宮に在して眞善美妙を以て莊嚴せる如來は、衆生の機感に應じて、衆生の信心想中に映現して、其の心宮に靈應身を降臨し給ふ。是れ宗教的中心の本尊なり。

此時に従來の我は降服して如來の法子として聖き生命に更生したるものなり。靈應の指導の下に光明生活の向上の一路の光明大道。

宇宙の最高至尊の在す華藏(けざう)世界に向つて其の如來照鑑の下に往邁進趣す。之れ現在に理想的に光明中の法子の進む大道なり。

彌々命終つて正しく涅槃なる華藏界に實在的に生れて文珠普賢の行願を學ぶべきものなり。

(註—華藏界とはお淨土)

目次

大ミオヤ	九頁
あなたの前に在す	一一
近縁	一二
中心本尊	一二
ミオヤの御答	一三
誠の内容	一五
修行に出された人生	一九
オトウサマ	二一
すべての人は同胞	二二
光明	二二
献身	二三
信仰三階	二七
歸命	二九

融合	三五
安住	三八
情操	四〇
信仰三要領	四三
人中の白蓮華	四五
炎王光	四七
業障	四八
煩惱障	四八
自己の根底	五〇
眞實の自己	五二
無明	五六
自覺	六二
見惑	六三
人間中の十界	六八
地獄の三階	七〇

我痛の魔	七二
心具十界心造十界	七八
人格の因と縁	八一
因	八六
縁	八八
縁を以て因を矯正す	九〇
因縁所成の理	九一
生命向上	九三
宗教の要	九四
五痛	九六
行蘊魔	九八
識蘊魔	一〇三
増上縁	一〇八
業の勢力	一一一
解脱の要	一二二

顛倒の夢想	一一四
衆生の顛倒	一一五
絶待の安住	一一九
光明主義四諦	一二一
煩惱は恩寵	一二三
惡質脱却光明	一二四
靈光反映	一二六
知情意の垢	一二七
炎王光	一三一
本篇	
宇宙の體系	一三七
一貫の理性	一三八
絶對理性	一三八
現象と實體	一三九
一切知一切能	一四二

無明何より起る……………	一四三
無明……………	一四五
遠心力求心力……………	一四八
無明と一切能……………	一五〇
六凡四聖……………	一五五
炎王光……………	一五六
炎王光……………	一七〇
三聚衆生……………	一七二
神人致一と分別……………	一七三
宗教の機能致一……………	一七五
如來と衆生の分別……………	一七六
如來と衆生との致一……………	一七七
世界の所依……………	一七八
世界と心靈界……………	一八一
世界厭欣觀……………	一八三

解脱すべき世界素質……………	一八五
解脱の世界……………	一八七
十二因縁……………	一八九
十二因縁……………	一九一
十二因縁……………	二〇五
十二因縁……………	二一五
十二因縁(講演目次)……………	二二一
炎王光……………	二二七
流轉説の目的と方便……………	二二八
後篇	
皮殻……………	二三三
心は西にうつせみの……………	二三三
拍子の音……………	二三六
人生の宗趣……………	二三七
目次……………	二三九

炎
王
光
終

辨榮聖者光明大系炎王光非賣品
昭和三十四年二月二十聖日發行
編輯兼發行人東京都港區芝白金
今里町八十二番地寓居田中木又
印刷人東京都千代田區神田神保
町三ノ一〇番地春山治部左衛門

發行所 東京都港區芝白金今里町八二

ミオヤのひかり苑

取次所 兵庫縣蘆屋市六麓莊町四三

光明會本部聖堂